

小学部  
「遊びの指導について」

# 「遊びの指導」について

主体的な姿と「遊び」とが、どうつながるのか。

私たちは、子どもの学校生活を計画、準備していく段階から、子どもの主体的な姿を大切にしていける。それを小学部段階で具現化していく際に「遊び」が子どもにとっても教師にとっても大変魅力的な活動としてあがってくる。「遊び」は発達が未分化な段階にある子どもが多く時間を費やして取り組んでいる、いわば子どもの生活の核となる活動であり、存分に遊ぶことで子どもは大きな満足感を得られるものである。

つまり「遊び」は、子どもが大きな満足感や成就感を味わい、その活動を楽しみにするという生活が自然に仕組める取り組みであり、発達が未分化な子どもにとって「遊び」は主体的な活動になると言えよう。子どもにとって主体的な、「私もやってみたい」学校生活であるために、積極的に「遊び」に取り組んでいきたい。

# 「遊び」を単元化する意味

本校では、子どもが取り組みやすい学習活動である「遊びの指導」を、単発的・分断的に設定するのではなく、週時程のメインの時間(3・4時間目)に設定し、その遊びを一定期間継続している。そのように計画することで、今日の活動に満足した思いが「明日もまた遊ぼう」と次の日の活動へとつながりその時期の生活に目当てや見通しがでてくる。一定期間継続して遊ぶことで、遊ぶ機会が増えたり(～その日の体調が悪くても次の日がある。また、1日の中でも子どものコンディションに合わせて少しでも遊ぶ時間が持てる)、繰り返し遊ぶことで遊びの楽しさを味わい、遊びの幅が広がっていったりすることも考えられる。

子どもたちの普段の遊びとは別に、みんなで遊ぶという単元を計画することでその時期の活動に「〇〇ランド」というまとまりができ、**子どもの気持ちも「〇〇ランドで遊びたい」と前向きなものとなる。**子どもにとって、その子どもらしい「楽しいな」、「嬉しいな」、「また、したいな」という気持ちがいっぱいの心豊かな生活、つまり、子どもにとって主体的な生活となっていく。

# 子どもが楽しく、存分に遊べるように

発達が未分化な段階にある子どもにとって魅力的な遊びを、小学部の学習活動の柱の一つとして取り上げ、展開しているわけであるが、その活動の魅力が増すように教師は子どもに合わせた場の設定や遊具の工夫をしていく。

もし、遊べていない子どもがいたら「子どもは遊べないのではなく、遊べない状況に置かれている」という捉え方をし、その子どもが遊べるように場の設定や遊具の工夫をし、どの子どもも遊べるような状況を整えるようにする。そうすることで、子どもは、思いっきり遊び、その遊びに満足感や成就感を味わう。また、安心して遊び場で過ごせるようになることで、そこで遊んでいる友達の様子を見たり声を聞いたりして過ごすことで満足感を得ることもある。

このように、どの子どもも生き生きと活動できるように、**教師は遊び場の設定や遊具などを子ども一人一人に合わせて工夫をしていく。**遊び場や遊具を、新しく作ったり、既成のものに一工夫加えたり、改良したりして、子どもが楽しく存分に遊べるようにしていきたい。

## 合同で遊ぶ意味

特別支援学校では、多くの場合、子どもも教師も少人数の学級となる。そのため、本校では普段の生活とは違った、複数の学級や学年、また小学部全員での遊びを計画的に準備している。少人数の中では味わえない、**たくさんの仲間とのかかわりや賑やかで元気な仲間とのかかわりや仲間のいる明るい雰囲気**がそこには存在する。また、教室という狭い空間だけでは味わえない、**大きな場の雰囲気や多種多様な遊びの内容、ダイナミックな遊び**などが存在する。

遊びそのものの魅力や共に活動する仲間の魅力がその時期の子どもの学校生活を楽しみのあるものにし、「学校に来ることが楽しいな」という思いが、今の学校生活を豊かにしていくのである。

# 共に遊びながらの教師の支援

子どもにとって魅力的な遊び場「〇〇ランド」に、教師の「共に遊ぶ」という支援が加わることでその遊びが、更に豊かなものとなっていく。子どもと一緒に遊んで、楽しさや喜びを共感し、そしてまた遊ぶことで、子どもにとって**教師が共に生活する仲間**として重要な存在となる。教師と一緒に遊んだり、子どもの側で一緒に周りの遊びの様子を見たりすることで、その子どもが感じている気持ちや思いを発見して共感できると気持ちや思いに沿ったかかわりが持てるようになり、子どもの感じている「楽しいな」、「うれしいな」という気持ちがより強いものになると考える。また、教師自身が楽しむことで、子どもの活動が広がるきっかけとなったり、場の雰囲気盛り上がり楽しくなることも考えられる。**子どもと共に遊ぶ中で、共に楽しむ、共に喜ぶ**という、遊びの中に本来含まれている良さを子どもと共にしっかりと味わいたい。

# 滑り台のよさについて

—なぜ滑り台なのか なんてだろう???—

子どもの活動が広が  
りやすい

みんなが（知的障害を持つ  
子どもも肢体不自由の子  
どもも）遊ぶことができる

幅や高さ、斜面の長さ等を  
変えることで、いろいろな  
タイプの滑り台になる  
＝いろいろな遊び方、楽  
しみ方ができる

私たちの技術から作るこ  
とのできる妥当なもの  
＝安全性が保てること  
につながる

大型の滑り台だと、多くの人と一緒に  
遊ぶことができる  
＝自然に人と触れ合うことができる

子どもの遊び心を  
くすぐりやすい

遊び方にバリエーションが  
ある（いろいろな滑り方）

子どもの興味や関心を引  
きやすい

# 小学部が考える遊び場のコンセプト

遊び場は、私たちが目指すものを現実のものにしていく場

## 遊び場を考えるに当たって…

すべての子どもが、興味や関心を広げ、生き生きと楽しく活動できる場であってほしい

子ども一人一人に対する思い

Aくんはこういうことが好き  
Bさんはこういうことを喜ぶ  
Cくんにこんなふうに遊んでほしい  
Dくんのこんな姿を見たい  
など

すべての子どもが、人のかかわりを楽しむことができる場であってほしい

## キーワード

- 多様性のある遊び場
- 思いきり遊べる遊び場

- 構えなくても仲間と自然にふれあえる遊び場
- 大人数で遊べる遊び場
- 多くの子どもの興味を引く遊び場
- 多くの子どもの遊び心を駆り立てる遊び場

大規模な遊び場  
大仕掛けの遊び場

私たちは、この遊び場で私たちの教育が  
目指しているものを現実のものにしていく！